

architect interview

Yoshihiro Hirotani
Yusaku Ishida

archivision-hirotani studio

Mie prefecture kumanokodo center



厳しい自然と対峙し、熊野古道の風景に 溶けこむ美しいフラットな屋根。

三重県立熊野古道センター 設計者／株式会社アーキヴィジョン広谷スタジオ
仕様／亜鉛合金板一文字葺

広谷純弘さん (写真左)

株式会社アーキヴィジョン広谷スタジオ
代表取締役

石田有作さん (写真右)

取締役・副所長

1992年株式会社アーキヴィジョン広谷スタジオ設立。
主な作品・富山市コミュニティセンター(福沢・小見・大庄
地区)・三重県立熊野古道センター・レイモンド保育園等、
公共建築賞・グッドデザイン賞・キッズデザイン賞他多数



ダイナミックな空間と組み木細工のような繊細さを併せ持つ、三重県立熊野古道センター。設計者はプロポーザルコンペによって選ばれた、建築研究所アーキヴィジョンの担当で副所長だった広谷純弘氏。広谷氏は独立後も熊野古道センターの完成まで携わった。

「熊野古道にふさわしい木造の建物とするため、尾鷲ヒノキという地場産の材料を、市場に流通する規格のまま使用しました。またトラス架溝や集成材を使用せず、同一断面(135mm)の無垢材の集積による、「等断面集積木造構法」という今までにない工法で、大空間を実現することを試みました」。

構造は尾鷲ヒノキの135mm角の組柱

と組梁の軸組。耐力壁も組み壁。基本構造ユニットの組み立ては工場でおこない、現場では伝統工法で施工できるように設計。さらに使用した尾鷲ヒノキ6549本すべてに対し、トレーサビリティを明確化している。棚田が尾鷲湾に向かって緩やかに下っていく段状の周辺環境に、水平性を強調した施設が調和している。「熊野古道は長い歳月を重ね、しっとりとした日本の原風景を醸し出しています。この建物も棚田のリズムを崩さず、自然に溶け込むことを考えました」(広谷氏)。

美しい風景は、つねに厳しい自然環境と隣合わせでもある。尾鷲は非常に雨が多い地域であり、台風の通り道としても

知られる。また海から陸に登ってくる風の圧力で、屋根がめくれ上がる危険性もある。そういった条件から導き出されたのが、このフラットに近い形状の屋根だ。さらに屋根を「点」で固定するのではなく、しっかり貼り付ける「面」による固定が必須となり、パーフェクトルーフが採用された。同社では以前にも、いくつかの案件でパーフェクトルーフの使用経験があったが、大々的な使用は今回が初の試みとなる。今回の評価を受け、現在進行中のプロジェクトにも検討中だという。パーフェクトルーフに求めるものとして、広谷氏は設計の自由度をあげる。「本来、金属屋根でできなかった複雑な形が、質感を保ちながら表現で

きる。それによってデザインの提案も安心してできますから」。

取締役・副所長の石田氏は「いちばん心配なところに対して、もっとも適切な形で対応できている点」だと語る。「今回はできるだけフラットなものを求めていますでしたが、変形した屋根の場合、どうしてもジョイント部分が弱くなる。パーフェクトルーフは、こういった変化に追従しやすい。だから安心して使えます」。

三重県立熊野古道センター

世界遺産・熊野古道を核とした地域振興の拠点施設として、2007年2月に開館。展示棟、交流棟、研究収蔵棟の3棟に分けてまとめられ、大空間である展示スペースと交流スペースを主空間として、周りに関連諸室を配したおらかな平面構成となっている。